

令和2年1月7日

学位請求論文（課程博士）審査報告

学位請求論文： コーパス調査による事実条件文についての研究

学位請求者： 文学研究科博士後期課程日本語日本文学専攻 孟 慧

審査委員

主査	文学部教授	高橋雄一
副査	国立国語研究所共同研究員	鈴木 泰
副査	文学部教授	丸山岳彦

審査報告

孟慧氏の学位請求論文「コーパス調査による事実条件文についての研究」は、現代日本語の条件表現の一種である事実条件文についての総合的な研究である。

孟慧氏は、専修大学大学院の修士課程在学時からこのテーマに取り組み、博士後期課程でも研究を続けてきた。博士課程在学中には5本の論文を発表し、そのうち4本がそれぞれ博士論文の一部となっている。

日本語の条件表現については、これまで多くの研究があり、古代から現代にかけての各時代の複文の体系における観点や、日本語非母語話者における習得の観点など、様々な観点から論じられてきた。孟慧氏の研究は、現代語の条件表現のうち、事実条件文と呼ばれるタイプを対象にしている。下に孟氏が先行研究から引用している例文を挙げる。

- (1) ボタンを押すと、お釣りが出てきた。
- (2) 箱を開けたら、中にハンカチが入っていた。

このような事実条件文は、仮定条件を表す条件文とはかなり異なるものであり、そもそも条件表現と認められるか否かについても、先行研究において見解の相違が見られる。孟氏は、先行研究における議論を十分に把握した上で、国立国語研究所等が作成した現代日本語のコーパス（ここではコーパスとは「言語を分析するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与したもの」とする）を利用した調査により、確実な根拠をもとに、事実条件文についての独自の論を展開している。

以下、博士論文の内容について、いくつかの章ごとに述べる。

まず、先行研究のまとめを、第2章「従来の研究における事実条件文の捉え方」と第3章「事実条件文の用法」で行っている。第2章では、条件表現全般の研究史と、その中で事実条件文がどのように扱われてきたかを述べている。日本語の条件表現については、松下大三郎の研究から後が取り上げられることが多いが、孟氏はそれ以前の、大槻文彦と山田孝雄の文献も参照している。これらを参照することにより、松下大三郎の研究が画期的であったことをより明確に示せていると言える。これらの古い時代の文献の理解には、後年付けられた解説や、近年の研究者による研究史の助けを借りているところもあるが、そういったものを読むことにより、研究史についての理解が深いものになっていることが分かる。さらに、近年の、1990年代以降の研究については、修士論文の段階ですでに参照したものも含まれているが、修士論文は中国語との対照研究の側面があったため、日本語の条件表現の先行研究については、参照した数が少ないことが口述試験の際に指摘されていた。博士論文ではこの点を克服し、近年の研究についても数多くの研究を参照している。

第3章では、事実条件文に絞って4つの文献を取り上げ、事実条件文の内訳がどのようなタイプに分類されているかをまとめている。4つの文献においては、前件と後件の主体の異同によって分けるか、前件と後件の因果関係の有無によって分けるかという見解の違いがあり、それによって分類の内容にも違いが見られる。孟氏は議論を詳細に整理し、自身は「連続」「きっかけ」「発見」「発現」「時」という5つに分類する立場をとっている。この他、事実条件文が「と」で表される場合と「たら」で表される場合の違いについても先行研究の見解をまとめている。これは、後のコーパスによる調査において検証の対象になっている。

次に、各種のコーパスによる調査結果が示されている第4章「コーパスによる事実条件文についての分析と考察」について述べる。この内容は、孟氏がこれまで発表した4本の論文と、論文化されていない1件の研究発表で構成されている。論述の順に紹介すると、まず、現代語の各種の書き言葉を集めたコーパスを使用して、事実条件文が「と」による場合と「たら」による場合で、それぞれ事実条件文の4つのタイプのどれに使われる傾向があるのか、また、前後件の動詞に使用の傾向はあるかといったことを調べている。さらに、文章の種類にも注目し、「と」はどのような場面でも使われるが、特に紙媒体で書き言葉としてよく用いられ、「たら」はネット媒体でくだけた書き言葉や話し言葉としてよく使われるという傾向を示している。次に、日本語学習者の話し言葉と書き言葉を集めた各種のコーパスを使用し、特に中国語を母語とする日本語学習者による事実条件文の使用について調査している。さらに、同じコーパスに含まれている、日本語母語話者の同一場面での使用との比較も行い、その特徴について考察している。また、中国語と日本語の対訳コーパスを使い、「たら」形式の条件文がどのように中国語訳されているかという調査も行っている。

最終試験（口述試験）では、主に次のようなことが指摘された。

研究テーマである「事実条件文」については、そもそもこれを日本語教育において学習項目とする必要があるか否かについての議論があるとよいという指摘があった。

第2章、3章でまとめている先行研究については、多くの研究を整理することができている点は評価できるが、孟氏自身の立場から批判的に述べるという姿勢があるとさらによいという指摘があった。

第4章の調査については、まず、ここで利用しているいくつかのコーパスに関して、それぞれのコーパスの特性に応じて調査をしていることを明確にすべきという指摘があった。それぞれのコーパスを利用することで、日本語のどのような側面をカバーできているのかを明確に述べるとよいという指摘である。同様に、まとめについても、特に第4章は各節のまとめのみではなく、章全体のまとめがあるとよいという指摘があった。

また、日本語母語話者の用例に、「発現」に類似しているが定義には当てはまらないものがあったことを、「日本語母語話者が典型的とされない事実条件文を使っていることが分かった」と表現しているが、“典型”を母語話者の使用以外において設定しているとも取れてしまうため、表現を適切なものにすべきという指摘があった。

さらに、第4章の調査は既発表の論文をもとにしているので、博士論文執筆の段階で事実条件文の分類に入れた「時」が調査に含まれていないという問題が指摘された。論文全体のバランスにおいても、コーパスによる調査の部分は、先行研究をまとめている部分に比べると比較的量が少ないので、今後の課題として「時」についての調査を付け加えてもらいたいという要望があった。

以上のように多くの指摘があったが、審査の結果、孟慧氏の論文は、事実条件文について先行研究を十分に把握し、実例に基づいて事実条件文の諸用法の精査を進めていることから、高く評価されるものと考え、博士の学位を授与するに値する論文と判定した。